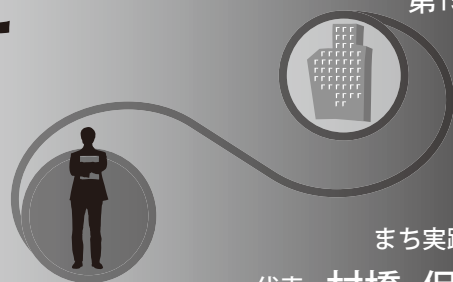


地方自治体といかに 連携するか

～地域振興への次なる取組み～

地域連携における「学」の意義
—求められる人物像—



まち実践社

代表 村橋 保春

イニシエーションとしての 有識者会議

経営学者の文章は心に響かない。彼らの書き記すところはいかに要領よく仕事をするか、いかに見栄えよく振る舞うか、いかに先んじて出世するか、そうした皮相的な内容にとどまる。話のネタは海外に求め、気の利いたフレーズをいち早く翻訳し、自分の手柄にする。オリジナリテイはない。実社会において多種多様な背景を持つ人々と接し、互いに葛藤し合う状況を時間をかけて地道に解決するように努め、共有できる目標の実現のため協同する人の繋がりを組み上げ、実践により得られた成果を適切に分ち合う、社会において不可欠な原体験を持つことができなかつた。人としてのあり方、生き方について言葉を紡ぐことができない、さもありなんである(注)。

上位層を目指す分厚い中間層は崩壊に向かっている。経営学者に対する市場は縮小し、行く末は憂いに満ちている。地域振興に関わる連携に際し「学」を有識者として加えることが多い。「学」から何らかの知恵を得たいとは考えていない。現場で培った実績だけでは蛙観・仰視に留まるとして、高邁な知識を持って理論化を進める有識者に鳥瞰・俯瞰の視点から意見を賜るというポーズをとる。事業実施の根柢となる情報収集、意思決定のプロセスにおいて、透明性と公平性を担保したとする。モデレートされた中に多少のスパイスを利かせる有識者が好まれ、頻度高く委員に招聘される。有識者会議は新たな論点を見出し、事業の質的向上を求めることなく、単なるイニシエーション、通過儀礼として執り行われる。

か。社会において豊富な原体験を持ち、社会問題となる事象に対して客観的で体系的な知識を投影することにより調和的解決に導くことができる人物である。研究教育機関においても自浄的にこうした人材の確保・育成が進んでいる。

実務と理論の融合—新しい 経営研究者像

実効性のある地域連携活動を展開する研究者である酒井理氏を取材した。同氏は法政大学キャリアデザイン学部教授でサービスマーケティングを専攻し、主として流通や金融の分野でのマーケティングを研究している。同学部は自らのキャリア(生き方、学び方、働き方)を主体的に開拓できる自律的・自立の人づくりを目指しており、ビジネス系人材育成はもとより、高齢者問題や文化教育の研究・教育を行っている。

酒井氏は実践的な現場実務経験を重ねている。大学卒業後東京都庁に奉職し、都の専門職制度に手をあげ東京都商工指導所

に配属された。同指導所は戦後法制度化された中小企業指導所の一環として東京都に設置されたもので、むき出しの現場と関わり合い、実態を調査分析し、望ましい事業の方向性を指導する役割を担う。同所員として毎月一つの商店街を調査しビジネスの観点から求められるあり方を報告してきた。多くの事例を深掘りし関係者に方向性を提示し続けることはまさに力仕事であり、知的筋力を高める原体験である。飽くことなく業務をやり遂げてこそ、多角的観点から問題解決を図ることができるようになる。同氏はこの間修士・博士課程で理論上の研鑽も積み上げ、体系的理論構築も進めてきた。実務と理論が融合する新しい研究者像を体現する。

社会における豊富な原体験を引っ提げて「学」の世界に入った酒井氏は「学」の強みと弱みについて語る。研究者として自らの関心に基づきフットワークよく行動できることは強みである。弱みとしてはその行動を地域においてふさわしい活動へと展開するための実行力、有体ありていに言えば活動を裏打ちする資金が不足する。地域に関わるコンサルタントは地域にどっぷり入り込むことができるが、研究と教育の両面を持つ大学の場合地域との人間関係を深めることが難しい。時として地域の関係者は大学にいいように扱われた印象を持つことがある。大学と地域との連携が難しい要因である。

実践：大学が果たす地域振興

酒井氏は大学と行政それぞれの特性を理解し地域振興活動を数多く推進している。前任地大阪では商店街振興に深く携わってきた。培った人間関係は信頼関係に進み、法政大学に移った後も関係は続いている。現在は長野県飯田市にある水引組合みずひきの事業展開の研究・指導などを行っている。

水引とは冠婚葬祭の際の贈り物の包み紙などに掛ける帯紐おびなひもという。飯田水引は水引全体の約70%の生産シェアを誇る伝統工芸である。同氏の研究室に対し飯田市から地域産業としての展

望を指導してほしいとの相談があった。行政との事業実績と実践力に基づく依頼である。

事業期間は3年間、1年目は実態調査を行い、2年目以降望まれる事業展開を大学側から提案するスキームとなる。行政が期待するアピールポイント、落としどころについて本音と建前を忖度そんたくしながら、現場を知る研究者として新たな視点を提示し水引組合をブレイクスルーさせることが求められる。組合参加企業に対し水引コンテストの実施を提案し、コンテストを通じて飯田水引が抱える課題を把握し、培った実力で現状を打開し、さらなる発展にいかにつながるか、水引組合自らが考える状況を生み出した。

事業を独立したプロジェクトとして捉え、大学主導でいかに廻していくか。現場実績に基づく現業の感性を持たない経営学者では、地域の人々と協同してPDCAサイクルを進めることができない。酒井氏の活躍は新たな産学連携の方向性を指し示すものである。

「学」と連携する際には二つの視点に立って判断することが望まれる。一つは実行力を持った機関であること、もう一つは現場に関わる原体験を豊富に持った研究者であること。地域は学生の社会体験の場として利用されるだけでなく、「学」から多面的かつ総合的な新しい観点を提示を引き出し、連携して成果が確認できるまで実行し続けることが重要である。

地域金融の要として地域連携を目指す信用組合として、この論点に立ち、日ごろから教育機関や研究者とともにネットワークを拡げ、深めていきたい。

(注) 畏敬の念をもって文章に接することのできる経営学者もいる。マギル大学ヘンリー・ミンツバーグ氏、東京大学高橋伸夫氏、経営コンサルタンのトム・ピーターズ氏の著作はぜひ一読いただきたい。心打たれる。

地域連携の成果を高める「学」の見極め方